
少年達の黄昏

雨季兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年達の黄昏

【Nコード】

N7972F

【作者名】

雨季兎

【あらすじ】

少年、宇佐木聡波、14歳は、同じく14歳の弟、竜火と共に、様々な困難へと立ち向かって行く。異能力者モノです。

第零話『雨の記憶』

その日は、土砂降りの雨が降っていた。

辺りは既に暗く、時間帯は夜の11時をとうに回っていた。

しかし、街頭の助けで辺りは薄暗く、行き交う人の顔くらいは見る事が出来た。

「君、ずっとそこに立っているつもりかい？そのままじゃ風邪を引いてしまうよ。ほら、これをあげるから…」

傘を差し出しながら、英国紳士のような黒いスーツを着た男が、11歳くらいの少年に話しかけている。

土砂降りの雨の中、傘も差さず、しかもこんな時間に小学生が歩いている訳が無いのだが、このご時世である。

最近では子供が家出をしたまま家に帰らないなんて話は、よくある事らしいと、何処かで誰かに聞いた話をぼんやりと思い出しながら、男は少年を眺めていた。

しかし、少年は何一つ荷物を持っておらず、靴すら履いていなかった。

まだ春先なのに、服は薄手の、病院等で支給されている制服のよくな白地の半袖で、履いているズボンも、上とお揃いなのか全く同じ生地と同じ色、しかも足首より少し上までしか無かった。

幾らなんでも、これでは寒すぎる…。

男は我が身のように身震いすると、差し出されたままの傘を更に少年に近付けた。

「さ、持って」

男が、酷い空模様にも負けぬ、爽やかな笑顔を少年に向けると、彼の右手を取って傘の柄をぎゅっと掴ませた。

少年は、ゆっくりと男を見上げ、それから更にゆっくりと、傘の柄を自分の力で掴んで受け取った。

しかし、その顔に表情らしい反応は見られず、虚ろな暗い瞳をじっと男に向けるだけだった。

「オイ、オッサン！」

「ん？」

男の影に隠れた場所から声がして、男が振り返る。

男の背丈よりも低い位置にある黒い傘が、男目掛けて差し出されていた。

「これは、なにかな？」

「…見れば分かるだろ？…傘だよ」

「…ああ、そうか、ありがとう」

男が嬉しそうに傘を受け取ると、そこから生意気そうな面をした少年が現れた。

男と合わせているのか、黒いスーツを着た、１１歳くらいの少年だった。

男が、連れであるその少年から傘を受け取ると、軽やかに数歩下がって、すぐにそっぽを向いてしまった少年を傘の下に招き入れた。その様子を、虚ろな眼差しの少年は、ただじっと見つめていた。

否、本当に見つめていたのか、本当はどこを見ていたのか、それは正直分らないところなのだが…。

「今車待ちなんだ。君も来るかい？うち、ここから少し行ったところ

るなんだよ。もし、君が良ければだけど…」

虚ろな視線は虚ろなまま、瞳の色も暗いまま。

それでも男は気にする事無く爽やかに笑って、やってきた黒いベ
ンツが少し遠くに止まるのを確認すると、傘を連れの少年に手渡し、
ちよつと行つて来る、と一声かけて駆けて行つた。

辺りは、相変わらずの土砂降りの雨と音に支配されていた。

男の背中を見送ると、連れの少年は迷惑そうに溜息を付いて、2
人きりにされてしまった少年の方を傘の隙間から覗き見た。

「………… オイ、お前、言葉が分からないんだろう？でも、なんと
な俺の気持ちは分かるよな？」

生意気な面した少年の、ぶつきら棒な囁く声に、男をターゲット
に追つていた虚ろな眼差しが、生意気な表情を崩さない少年の方に
ゆっくりと向けられる。

辺りは雨音が支配していて、少年の囁き声では、視線を向けてく
るだけの少年には、聞こえる筈が無かった。

しかし、それでも彼は続けた。

「お前がどこから来たのか、俺達は知っている。だから声をかけた
んだ。俺達に付いて来るのも、来ないのも、お前が好きに決める事
だ。…ま、お前に意思らしい意思は無いだろうけどな…」

吐き棄てるようにそう言うと、生意気な面の少年は、虚ろな眼差
しの少年に背中を向けると、さつさと歩き出した。

向かう先は、男の佇む黒いベントの方。

虚ろな眼差しの少年は、虚ろな眼差しのまま、それを確認したか
のように歩き出した。

ポケットに左手を突っ込んで大人ぶった歩き方をする少年の背中

をゆっくり、ゆっくりと追い駆けるように。

言葉は、聞こえなかった筈なのに…。

第零話『雨の記憶』（後書き）

まだ操作に慣れず、誤って本文を削除してしまいました…。（……；）
て事で書き直しました。
内容は変わってません。

小説についてですが、これはプロローグというのかなあ…？
専門的な事は、よく分かんないんですけども（オイ）、とりあえず
第零話、終わりです…。（^^;）

短くてすみません！

第一話『譲れない道』 その1

今宵は新月、時刻は夜中の三時を回る頃。

暗闇の中、数十人は居るだろうか…。

明かりの届かない森の中に、息を潜める者達が居る。

その者達の視線の先には、森の中だというのに、不釣り合いなくらい眩いライトの光が、四方八方から白い建物を照らし、そこだけ真昼のような様を作り出していた。

「聡波^{そつは}、君は、いつも通り組織の殲滅が仕事だ」

「…ああ」

軽く生返事をする、聡波と呼ばれた少年は前方を見据えた。

森の中に、一見病院のような、何かの施設を思わせる、白い大きな建物が不自然に建っている。

表向きは、どこぞの金持ちの別荘ということになっているらしいが、中で何が行われている事やら。

聡波には、それが何なのか、想像せずとも分かっていた。

否、知っていた。

「君を援護する者達が、四部隊に分かれて森の中に待機している。

聡波は、聡波のやりたいようにやって良いからね」

「言われなくてもそうするよ」

いつも自分に指令を出す男を横目でチラリと眺めやると、不安気にこちらを見ていて目が合った。

聡波は、それが分かった途端、不機嫌に顔を顰めて、その男、宇^う佐木^{さき} 直正^{なおただ}を睨み付けた。

「うぜえよ、その顔」

「ごめんな…、聡波…」

直正は、一言そういうと、苦悶に顔を顰めて俯いた。

直正の態度に、ただ苛立ちだけが募る。

「だからいちいち謝んなよ！人が気合い入れてる横で、そんな辛気臭え顔されると、やる気無くすんだよね！そこんとこ分かっててやってんのか！？」

「あ、ああ、すまない、本当にすまない。もうしないよ」

今から奇襲をしかけようというときに、聡波が声を張り上げたので、直正は顔を青くして慌てて両手を挙げて聡波を制した。

その様子に、聡波は諦めたように深く溜息を吐くと、前方を見据え直した。

視線の先に、森の中だというのに、違和感のある白い建物が建っている。

さて、どうしたものか…。

「……………」

密告者からの手紙に同封されていた地図は、もう頭の中にある。

監視カメラの位置も分かっている。

一緒に入っていた写真も全て記憶した。

他の者を茂みに身を隠させ、数日間監視もさせた。

それでも、これが罠である可能性は、高い。

しかし聡波は、まあ、中に入れば分かるか、と心の中で呟くと、直正の方を見もせずに歩き出した。

「…行つて来る」

「行つてらっしゃい」

不安を噛み殺した、直正の優しい声を聡波は背中で聞き流した。

入り口は、前方と後方、それから建物の側面と、全部で三つある。

「…面倒臭え…、とりあえず正面行つてみつか…」

小さな声で呟くと、着けていたイヤホンから、無茶しないでよ、と直正の慌てた声が聞こえて来たが、聡波は構わず身を屈めた姿勢で走り出した。

幸いな事に、今日は時折強い風が吹いていて、腰の丈まで生えた草や周囲の木々のざわめきが、聡波の足音を完全に消してくれている。

それでも周囲を警戒しつつ、聡波は正面入り口付近の草むらに身を隠した。

「……………」

扉の前に警備員が2人。

欠伸をしたりと退屈そうな様子から、中で何が起こっているのか、多分知らないのだろう。

ま、もし知っていたとしても、中にもっと詳しく知っている奴が居るだろうから、構いやしないが…。

そう考えて、聡波は周囲を見回した。

建物には窓はあるが、全て曇り硝子で中は全く見る事が出来ない。

これから、どうするか…。

色々考えた末、やはりこっそり入るのは無理そうだと判断した。

「仕方ねえ…」

聡波は被っていたテンガロンハットを目深に被ると、一気に走り出した。

第一話『譲れない道』 その1（後書き）

ちょっと、吃驚するくらい長くなったので、分割しました。

詰まったり引っかけたりと下手ながらに頑張っ
て行こうと奮闘中
です！

第一話『譲れない道』 その2（前書き）

■ 一応『登場人物』の名前の読み方等

● 宇佐木 聡波 ＊うさき そうは＊
主役です。

● 宇佐木 直正 ＊うさき なおただ＊
主役の父親です。

第一話『譲れない道』 その2

暗闇から光の世界へと、一陣の風のように駆け抜けて行く。

「……………!!」

聡波に気付いた警備員の2人が、何か叫んでいるようだったが、聡波には風の音しか聞こえない。

聡波は、警備員の言葉に興味も示さぬまま、突然の襲撃に対処出来ないでいる2人の内1人を蹴り飛ばし、壁に叩き付けて昏倒させると、その反動のまま、もう1人の鳩尾に回し蹴りをお見舞いして昏倒させた。

「ちよろいな」

そう言いながらも、聡波は警備員2人の呼吸を素早く目配せして確認すると、安堵したように軽く息をついた。

『無事か?』

「とーぜん」

いちいち確認のように聞こえて来る直正の声に苛立ちながらも律儀に返事を返すと、聡波は傍らの警備員から入り口付近にある監視カメラへと視線の向きを変えた。

帽子を掴んで視界を広げながら、堂々とそれに近付き見上げてみれば、赤外線照射器内蔵型の監視カメラだとすぐ分かる。

このタイプの監視カメラは、稼動中赤い点灯ランプが点いているものだが、それが消えている。

「親父、手紙の通り、監視カメラは切られてるみたいだな」

黒いスーツの上着の、胸の辺りに付けられたマイクに静かに話しかけると、耳に付けたイヤホンから、そうか、と一言、溜息のような声が聞こえてきた。

「とりあえず、罠の可能性は…、低くなっただけかな…」

綺麗に磨かれた、大きな硝子の扉を押し開けながら、そう言葉を発したとき、イヤホンから少し緊張した直正の声が聞こえてきた。

『聡波、マズイ…』

「どうした？」

『B班からの連絡で、周囲の茂みから白衣姿の男性の遺体が見つかったそうだ。まだ殺されて間もないらしい。まだ犯人が近くに居る可能性がある。気を付けて…』

「了解」

聡波は、返事と同時に走り出した。

建物の中は、間接照明しか点いておらず、薄暗い。

パツと見、まるで病院の中だ、と思いながらも、構わず一気に通路を駆け抜け、非常階段への扉を開く。

周囲に重苦しい音が響き渡るも、聡波はそんな事、気にも止めず、階段を飛び降りる勢いで駆け下り、地下三階の扉を開いて更に走った。

目の前に大きな観音開きの扉が立ち塞がり、そこでようやく聡波は足を止めた。

建物の中は、結構な広さだったにも関わらず、聡波の息は少しも乱れていない。

「親父、今、地下三階の例の場所の扉の前だ」

「……様子は？」

「……誰にも出くわさなかった……」

「……え？」

「……」

どういう事が分からなかったらしい直正の声に、聡波は返す余裕もなく、頭を悩ませていた。

目の前の扉を前にして、何だか嫌な予感がしてならない。

この場所まで辿り着くのに、誰にも見つからずに進めるとは流石の聡波も思っていなかった。

兎も角、ここまで人の気配一つしないとは……。

いくら監視カメラがあつたとしても、これが通常ならば、余りにも警戒心が無さ過ぎる。

万能に思える監視カメラにも、それぞれ弱点や死角があり、限度があるのだ。

普通の人間相手ならこれで十分かもしれないが……、生憎、聡波は普通の人間では無かった。

しかも、目の前の扉の向こうからは、微かながら人の気配がする。

「……」

少し考えるように目を左右に動かすと、イヤホンとマイクをそっ
と取り外して、ズボンのポケットに突っ込むと、軽く息をついて、
意を決したように扉に手をかけた。

大きさの割りに、軽い音を立てて扉が開く。

「……」

扉を開けた瞬間、広い室内の中段に、黒いロングコートの男が立

っているのが、目に飛び込んできた。

突然の来訪者に少し驚いたような様子で、こちらを振り向いた男の目元には、黒いサングラスがかっており、その表情はハッキリとは読み取れない。

顔をこちらに向けたままでいる男の、体が対面している方に目をやると、隙間無く培養液で満たされた円柱形の水槽があり、その中に聡波と年の変わらないくらいの少女が、膝を抱えて浸かっていた。

「あれまあ…、こりやまた小さいねえ…」

男は、おどけた口調でそう言うと、こちらに体の向きを変えながら、口の端をニツと吊り上げた。

第一話『譲れない道』 その3（前書き）

ちょっとグロいかも知れませんが、苦手な方は、お気をつけ下さい！

第一話『譲れない道』 その3

年の頃は、黒いサングラスのせいでよく分らないが、二十代前半くらいだろうか…。

聡波は動揺する事も無く、入り口の扉に手をかけたまま、静かに男を睨み付けた。

部屋の中は薄暗く、円柱形の水槽の中を照らす青白い光だけが、辺りを仄かに照らしている。

「……………」

男の様子を無言で伺うも、ただこちらをじっと見つめているだけで、その場から動こうとする気配は全く無い。

聡波は、男を睨み付けたまま、ゆっくりと室内に足を踏み入れた。後ろ手に、乾いた軽い音を立てて扉が閉まる。

「…君ー、ココの子？」

先に話しかけてきたのは、こちらをじっと見つめていた男の方だった。

聡波の体に力が籠るも、自然口の端が冷たく引き上がる。

「いや？…アンタはどうなんだ？」

「オレ？…オレもー…、ココの子じゃないよ」

軽い口調で話しながら、ニツと笑った男の目は、黒いサングラスの向こう。

あの黒いフィルターの向こう側では、どんな目をしてこちらを見ている事やら…。

聡波には想像する事しか出来ない。

「じゃあ君、能力者？」

「……………」

変わらない軽い口調で単刀直入に問いかけてきた声に、聡波は黙った。

こんな怪しい奴に、答える気は更々無い…。

「……………」

何も言わずにいると、男の眉が困ったように八の字になった。

「…え、なに？もしかしてダンマリい？」

「さあね…、そう言うアンタは？」

「オレ？オレは能力者だよ」

男の問いに答えぬまま、逆に問い返すと、男は、おどけた調子を崩さぬまま、きっぱりと答えてきた。

その瞬間、男の右手に大きな黒い死神の鎌のような影が現れたかと思うと、瞬く間にそれは振り回され、少女の入った円柱形の水槽を真つ二つに切り裂いた。

水飛沫を上げながら、音を立てて培養液が溢れ出す。

切り離された上部が、ゆっくりと硬い床へと落下し、硝子の割れる音が、激しく周囲に響き渡った。

何が起こったのか分からず、聡波は一瞬それを啞然と眺めてしまった。

だがすぐに、ハッと我に返ると、男が少女に触れようと手を伸ばすのを見て、咄嗟に走り出していた。

一気に懐に入り込み、慌てた男の顔を視界に納めた所で、構わず

一気に蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた男は、吹っ飛ばように弧を描いて、硬い床へと落下するかに見えた。

しかし、床に激突する瞬間、男はその場から忽然と掻き消えた。

「!？」

何処に行ったのかと辺りを見回すが、見つからない。

焦り始めたとき、両肩を背後からがっちり掴まれて心臓が飛び上がった。

「オレー、長々と世間話するのって、苦手なんだよねー」

背後から耳元に話しかけられる。

背筋にゾツと寒気がして、離れようと体が反応するが、男に両肩を掴まれて叶わない。

「まあ良いんだけど、…君、足早いねーえ…。オレすんげえ驚いた」

そう言うのと、男は何が可笑しいのか、聡波の耳元でクツクツと笑った。

「今回は君に免じて、この子は置いて行くよ。どの道、破棄するなり何なり、好きなようにして良いって言われてたからな」

そう言いながら、男は聡波の肩から手を離れた。

しかし、聡波が何かしら反応を見せる前に、聡波は胸の辺りから大量の血を吐き出して、あっと言う間に血でびちゃびちゃに汚れた床に、血飛沫を飛ばしながら体を横たえていた。

「じゃあね」

ニヤニヤと笑いながら、男はその場から、また忽然と姿を消した。後には、無残にも胸の辺りで横に真つ二つにされた聡波の亡骸が残され、そこから湯水のように溢れ出す血で、床は何処までも赤く、赤く染まって行った。

『聡波！！聡波！！何があつた！？聡波！！』

彼のズボンのポケットの中から、必死に彼の名を呼ぶ父親の声が、繰り返し繰り返し聞こえてくるも、答える者はもう、この世には…。

第一話『譲れない道』 その3（後書き）

空回りしまくりながら書きました…。

読み苦しい文章である事を深くお詫びします…。

すみません！

第二話『血塗られた道』 その1

「聡波！！聡波！！」

辺り構わず無線機に向かって何度も叫び散らす。

しかし、息子からの応答は無く、直正は、クソッと叫ぶと、焦りを持って余して周囲を見回した。

仲間達の顔が驚いたようにこちらを見ている。

堪らず視線を機材に下ろすと、直正はスイッチを乱暴に扱い、更に叫んだ。

「計画通り、全入り口に数名ずつ待機！それ以外は、建物の中へ突入後、指定の位置へ！何かあったら、俺に連絡しろ！」

冷静さを装いながらも指示を出す。

了解、と即座に行動を開始し始めた者達の声が幾つか返って来ると、直正は深い溜息を吐いて項垂れた。

背中を不快な何かが這い上がっては、全身から生温かい汗が噴き出し、全身を凍らせる。

彼に限って、何かある筈が無い。

そう分かつてはいるものの、聡波の安否が気にかかつては、過去の記憶が直正を苦しめた。

本当にこれで良かったのか、本当に彼の言う通りにやって構わなかったのか。

『おい、宇佐木、頼むよお……』

上司の男の、諭すような言葉が蘇る。

『お前のところに匿ってる餓鬼、こちらで使わせては貰えんかねえ……』

『…それは何度もお断りした筈です…』

『しかしなあ？能力者だなんて化け物に、俺達普通の人間が敵う筈あねえだろ？分かるよなあ？なあ？宇佐木？』

有無を言わさぬ上司の、優しくも見える冷酷な眼差しが、これは世界の為だと、力無き者達の為だと、静かに語っている。

その眼差しに、この状況に、ああ、これはもう逃れられないのだろっ、と直正は悟った。

警察機関であるが故、拒めない絶対正義という肩書が、様々な矛盾を際立たせては、直正の目の前に壁となって表れる。

ぐるぐると胸の中を駆け巡る感情で、今にも体が震え出しそうだった。

『しかし…、まだあの子達は小さいですし…』

『宇佐木、我々には力が無いんだよ…。すまないが、分かって欲しい…。もう、これ以上犠牲は出したくないんだよ…』

『……………』

悲しげに歪められた上司の顔を見てしまっただけは、お人好しの直正には、もう何も言う事など出来なかった。

シンと静まり返った室内で、静かに横たわっていた彼の体が、痙攣するようにピクリと動いた。

彼の亡骸を中心に広がった大きな血溜まりが、ポコリ、またポコリと気泡のようなものを発して、それがわつと増えて行く。

ポコポコと音を立てながら増幅したそれは、やがて波紋のように波打ちながら、聡波の方へと吸い寄せられて、それと同時に、綺麗に切断された部分から、意思を持つ触手のように、赤い神経のようなものが物凄い勢いで伸びて行った。

それは数え切れない程、幾つも幾つも床を這うように伸びていき、まるで離れてしまった互いを繋げようとしているかのように絡み合うと、切り離された胴体と、近くに転がっていた両腕をズルリ、ズルリと引き擦り上げた。

離れた部分と部分が合わさり、ポコポコと肉が盛り上がっては再生されて行く。

それは、長いようで、あつと言う間の出来事だった。

「よ……つと………」

血色を失った青白い顔で、必死に体を起こそうとするも、いつもの身軽さからは考えられない程体は重く、同時に襲った眩暈と吐き気、それから軽い呼吸困難で、聡波は仕方なく床に崩れ落ちた。全身に血を送ろうと、心臓がばくばくと脈打っている。

「はあ……」

息苦しさから深呼吸を何度か繰り返し、うつ伏せのまま、ズボン

のポケットへと手を伸ばす。

微かに震える指先に力を込めて、どうにかこうにかイヤホンとマイクを引っ張り出すと、聡波はイヤホンを耳にあててマイクを握り締めた。

「…ばけもの」

堪らず吐き出すように、一言静かに呟いてから、マイクを口元へと運ぶ。

誰も居ない室内では、微かな呟きすら遠く深く響き渡りながら聡波の耳へと届いた。

その呟きから吐き出されたのは、腹の中に泥の様に渦を巻く怒りにも似た嫌悪感。

「親父？」

『聡波！？…無事だったか！』

「ああ、まあ…」

『そうか…、良かった…』

安堵の溜息を吐きながら、微かに笑いを滲ませた直正の様子がイヤホンから伝わって来ると、いつも生意気な態度を崩さない彼も、流石に詰めていた息を吐きだした。

そんな自分に驚いて、バツが悪そうに顔を顰める。

『それで、状況は？』

「…それが……………」

聡波は、適当に状況を説明しながらも分かりやすく簡潔にこれまでの事を話した。

「男は女を捨てて逃げたぜ」

第二話『血塗られた道』 その1（後書き）

一応投稿してみました。もしかしたら書き直すなり何なり、
かもしれません…。 m (——) m

第二話『血塗られた道』 その2（前書き）

遅くなつてすみません…。 m (——) m

相当文章に煮詰まつてしまって、そのループから抜け出せませんでした…。

て言つか、今もそのループの真つただ中です…。

本当、遅くなつて申し訳ありませんでした。

第二話『血塗られた道』 その2

そう言うのと、一拍置いてイヤホンの向こうから、安堵とも悲しみとも取れる声で、そうか、と返事が聞こえた。

『…じゃあ救護班が必要だね。丁度今そっちに向かっているとこから、それまで宜しくな』
「了解」

聡波は、もう用は無いと言わんばかりにイヤホンとマイクをズボンのポケットに突っ込んだ。

足元を確かめるようにゆらりと立ち上がると、水槽の方を振り返る。

割れた水槽の中に、深く瞼を閉じたまま、座り込んでいる少女が居た。

水槽の床から発せられている青い光が少女を包み、そこから発せられている電子音が周囲に音を響かせながら、微かに聡波の耳へと届いた。

「……………」

あの男は、何者だったのだろうか…。

「能力者…、か…」

あの動き、空中で高速に移動する事等、普通の人間には勿論出来やしない。

しかし、高速で物が移動するのであれば、大概のものは、聡波の動体視力で捉える事が出来るだろうに、あの男の場合は、聡波のそ

れでも捉える事が出来なかった。

つまり、空中であろうと移動する事の出来る能力なのであれば、聡波の目で捉えられぬ程の速さで移動したのだと考えられなくも無いが…。

こびり付いた黒い影が脳裏をよぎる。

あの鎌は、一体何処から現れたのだろうか…？

いつの間にか俯いていた顔を上げると、聡波は少女の元へとゆつくりと歩を進めた。

水槽の切り口に手を伸ばせば、触れた場所から赤い血が溢れ、水槽を伝い落ちる。

「……………」

それを眺めていると、伝い落ちた血が生き物のように動き始め、足を生やしたように水槽を這い登ると、聡波の皮膚に絡みつки、あつという間に溶け込んで消えた。

そこに、血の跡どころか傷跡すらももう無い。

「…切り口が、有り得ないくらい綺麗だな…」

己の掌を見つめて眉間に皺を寄せる。

あの男の持っていた黒い大きな鎌は、一体何だったのか…。

聡波の入って来た扉の向こうから、複数の人間の足音が微かに聞こえてくると、思考に没頭していた聡波はハッと我に返った。

足音は、急速に、かつ静かに歩み寄って来た。

「そうは…！」

扉が躊躇無く開かれた瞬間、部屋に響くよく知る声。

振り向きざまに見た見覚えのある顔に、聡波はいつの間にか詰め

ていた息を吐き出した。

「おやじ…」

「……………つて、オイコラ聡波！！なんだこの服のあり様は！？切れてるじゃないか！！」

直正は、聡波の着ている、斜めに真つ二つに切り裂かれた有名ブランドのスーツを指差すと、辺り構わず真つ青になって叫んだ。
啞然とした顔で部下が見ているのも、敵基地のど真ん中だという事も、もうすっかり忘れている。

「アレクシアに何て説明すれば良いんだ！？」

「……………」

「ああああ…、こんなにしてー！ー！って言うか、何があつたんだ！？あれ程怪我すんなって日頃から言ってたんだろー！？お前なあ、俺だって、いつまでも温厚なフリしてると思ったら大間違いなんだからなー！ー！？」

「…フリだったのか…」

「突っ込むとこは、そこじゃなーい！ー！」

「……………」

一通り叫ぶと、直正は両手で顔を覆って頂垂れた。

「ああ…、なんて事してくれたんだ…！お前って奴は本当に……
（以下省略）」
「……………」

いつまでもメソメソと、いい加減腹の立ってきた聡波は、直正の脛に一発蹴りをお見舞いしてやった。

それを諸に食らった直正は、くぐもった呻き声を上げると、足を抱えてしゃがみ込む。

「…い…っ！…！たいじゃないか…っ！…なにを…っ」
「うるせえ、もう良いんだろ？さつさと車に戻るぞ」
「え…？」

悶え苦しみながら地面をのた打ち回っていた直正に背を向けると、聡波は振り返る事もせず扉の方へと歩き出す。

聡波の行動に目を白黒させながら、直正は慌ててその背中を追いかけた。

「えっ、ちよっ…？そうは！？もう行くの！？…つてえか…、俺の話聞いてた！？ねえ、そうは…！？おいっ！無視すんなよ…！」
「うるせえ…！！」
「…は…っ、…はい…、すみません…」

聡波の苛立った警告は、14歳とは思えぬ怖さで、震え上がった直正は、ただ素直に謝って下僕のようにその後ろを付いて行く事しか出来なかった。

第二話『血塗られた道』 その2（後書き）

文章がこれが限界でした…。すみません…。 m () m

頑張ったんですが…。結局こんなになってしまっ…。

や、もう、謝ってばっかなんですが、ごめんなさい…。 m () m

機会があれば、書き直すかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7972f/>

少年達の黄昏

2010年10月9日02時44分発行